

史料から探る「南海地震前の井水涸れ」

The decrease of well water before Nankai Earthquakes found out in historical documents and monuments

重富 國宏[1], 梅田 康弘[2], 浅田 照行[3], 細 善信[4]

Kunihiro Shigetomi[1], Yasuhiro Umeda[2], Teruyuki Asada[3], Yoshinobu Hosoi[4]

[1] 京大・防災研・地震予知, [2] 京大・防災研, [3] 京大・防災研・阿武山, [4] 京大・防災研・地震予知センター

[1] RCEP, DPRI, Kyoto Univ, [2] DPRI Kyoto Univ., [3] Abuyama Obs. DPRI, kyoto Univ, [4] RCEP, DPRI, Kyoto Univ.

昭和南海地震の約1週間前から直前にかけて、紀伊半島から四国の太平洋沿岸の広い範囲で井戸水が減った、或いは涸れたという報告がある(水路局、水路要報、1948)。南海地震の震源域・固着域等に関する最近の研究成果と異常が報告された井戸の地域的特徴を併せて考察することにより、新たな知見が得られつつある。地震前の地下水の異常現象が、果たして昭和南海地震以前の安政・宝永等の南海地震の前にもあったか否かの、すなわち再現性の検証は、地震発生前の地下水異常のメカニズム解明の動機づけ或いはモデルの精緻化に寄与するであろう。例えば、「いなむらの火」で有名な浜口梧陵が安政地震当日のことを記した「安政元年海嘯の実況」に「午後村民二名馳せ来たり、井水の非常に減少せるを告ぐ。予之に由りて地異の將に起こらん事を懼る。果たして七つ時ごろ至り大振動あり」との記述がある。そこで、我々は更なる確証を得るために、一昨年1月から地下水異常が報告されている和歌山・徳島・高知県下で、言い伝えや体験談の聞き取り及び郷土史(誌)・古文書・石碑等の調査を開始した。

地震発生に伴う津波の前兆としての井戸水の減少・涸れ・濁りの記述は多数の史料にみられるが、明瞭に地震発生前の現象と判断できる記述は、今までのところ殆どみられていない。現時点での特筆すべき資料は、文政10年(1827年)土佐国幡多郡中ノ濱(現土佐清水市中浜)に生まれた池道之助が書き遺した「今昔大變記」のなかの「嘉永七年寅年地震津波記」である。そこには、「大地震の前には急に井の水へる物なり、へらぬ井戸はにごるものなり」「汐のくるう時井戸の水にごれば必大地震の下地なり」との記述がある。また、土佐清水市中浜にある池家の墓碑には、「前日ヨリ潮色にごり津波入並二井ノ水にごる或八干かレル所も有」とある。但し、井戸水が減少した或いは涸れたのが具体的に何処どの井戸であったとの記述は無い。また、「前日ヨリ」の件りは、前日に発生した東海地震に伴う現象だった可能性もある。しかし、「大地震の前には急に井の水へるものなり」と断定的に記述していることは、少なくとも言い伝えにせよ、それ以前にも似たような現象があったことを伺わせる。もとより、調査はいまだ緒に就いたばかりである。しかし、我々はこの調査を継続していけば、「南海地震前の井水涸れ」の記述に及ぶ、更に新たな資料を得ることができるとの確信をもっている。

殆ど手探りの状態から出発した今回の調査がまがりなりにも実施でき得ているのは、高知大学理学部附属高知地震観測所長 木村昌三郎助教授、高知地学研究会 小松勝記氏のご教示に負うところが大きい。記して感謝の意を表します。